

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00122

研究課題名（和文）美術批評家ヴァルデマール・ジョルジュの批評における「伝統」概念形成に関する研究

研究課題名（英文）A study on the formation of the concept of "tradition" in the criticism of art critic Waldemar Georges

研究代表者

飛嶋 隆信 (Tobishima, Takanobu)

東京農工大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：60302915

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：ポーランド出身の仏美術批評家ヴァルデマール・ジョルジュの活動は、両大戦間期のヨーロッパ諸国で、近代芸術における伝統の再構築を目指す様々な試みの特異な例であった。彼は、フランス美術の本質をあらゆる極端さを回避した「中庸」に求めるといふ、当時のフランス美術の批評に見られた傾向の枠内に収まらず、ファシズム政権下のイタリア美術界、特に「ノヴェチェント」との連帯を目指したが、理解を得られず、当時のイタリア考古学界主導で進められていた古代ローマ文化の復興と顕彰という動向に活路を求め、自身が主導する「ネオ・ユマニスム」までもファシズムを裏付けるローマ文化の子孫として位置付けるに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヴァルデマール・ジョルジュの言説の論理を、当時のイタリア考古学の状況を背景に分析、彼が古代ローマという「伝統」により、伊仏芸術の連帯・再構築という自身の理想を正当化しようと試みたことを明らかにした。また、彼が西洋文化の辺境に位置づけられていた東方の文化圏に対しても関心を維持し続けていたことを指摘、表面的には敵対するようと思われる美術批評家バーナード・ベレンソンや、美術史家ヨゼフ・シュゴフスキーらとの間に、国民国家の「外部」の視点からの伝統構築、という共通した問題系が存在する可能性を示唆し、両大戦間期の美術史や美術批評をめぐる錯綜とした状況を解明するための一つの視点を提案した。

研究成果の概要（英文）：The activities of the Polish-born French art critic Waldemar Georges were a unique example of various attempts to reconstruct traditions in modern art in European countries between the two world wars. He did not fit within the framework of the trend observed in French art criticism at the time, which sought the essence of French art in a "middle ground" that avoided all extremes, and he instead sought solidarity with the Italian art world under the Fascist regime, especially with the "Novecento," but he was not understood. Then he sought a way out in the movement to revive and celebrate ancient Roman culture, led by the Italian archaeological community at the time, and he finally came to claim the "Neo-Humanism" he led as a descendant of Roman culture considered a guarantor of the authority of Fascism.

研究分野：美術史、美術批評史

キーワード：美術史 美術批評史 伝統 近代芸術 イタリア フランス 古代ローマ

1) 研究開始当初の背景

19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパ美術では、印象派、キュビズム、フォービスム等、数々の新しい潮流が生まれたが、両大戦間期の1910年代末から1930年代にかけて「秩序への回帰」と呼ばれる復古的傾向が顕著となった。また、20年代後半から30年代にかけては、ギリシャやローマ、あるいはエトルリア等、古代文化を近代芸術の「起源」として参照する論考が各国で多数発表された。こうした状況下、フランスの美術批評界で頭角を表したのが、ポーランド出身の美術批評家ヴァルデマール・ジョルジュである。彼は、キュビズムに対する批判的評価に関する研究『キュビズムとその敵』(Christopher Green, *Cubism and its Enemies: Movments and Reaction in French Art, 1916-1928*, Yale University Press, 1978)等、数多くの論文や研究書で、キュビズムの擁護者が転じて反動的な批判者となった例として取り上げられてきた。その彼の業績の全体像は、Yves Chevrefils-Desbiolles, *Waldemar George, critique d'art : Cinq portraits pour un siècle paradoxal. Essai et anthologie*, Presses Universitaires de Rennes, 2016. の刊行によって明らかになったが、ヴァルデマール・ジョルジュが最も積極的に活動した1930年代に、ファシズム政権下のイタリア美術界に接近した経緯について同書は概要を述べるに留まり、彼が伊仏を軸とした文化圏再構築の構想を打ち出した理由について、イタリア美術界や考古学界の動向をふまえた分析は十分にはなされていない。

2) 申請者は、上述の「秩序への回帰」と呼ばれる復古的傾向については、様々な要因が複雑に絡み合い、一国単位ではなく、複数の国家間の文化交流等も考慮に入れねば実態は明らかにならないと実感し、近現代芸術の「起源」を古代文化に見出そうとする数多くの試みについても、近代の国民国家の枠組みを越え、錯綜とした様相を呈していることも事前の調査で確認していた。また、近代芸術に対する価値判断を通じて自国独自の「伝統」を強調する言説を、時代背景と併せて分析する事が重要だと判断した。

そこで、フランス国内については、ヴァルデマール・ジョルジュ自身が関わっていた『藝術愛好』(*Amour de l'art*)誌を主宰していたルーヴル美術館の学芸員ルネ・ユイグを始め、あらゆる極端な造形上の革新とは距離を置く「中庸」にフランスの芸術の本質を見出そうとした論者の言説を中心に調査を進めた。その過程で、ヴァルデマール・ジョルジュの批評活動がそのような「中庸」の美学をある程度踏襲しつつも、その枠内には収まりきらないことを認識した。こうした特異性は、ポーランド出身のユダヤ人美術批評家というヴァルデマール・ジョルジュの出自が齎し得る影響や、彼に影響を与えたり、彼が関心を抱いた近隣諸国の美術史家や批評家らの言説と、彼自身の言説の親近性や差異を分析することで、その原因を考察する糸口を見出せると判断した。

以上の課題に対する具体的な取り組みとして、同時代のイタリア美術界の状況、特に、美術批

評家マルゲリータ・サルファッティが提唱し、近現代芸術の枠内で伝統の再構築を目指した運動「ノヴェチェント」から、ヴァルデマール・ジョルジュがどれだけ影響を受けていたかについてまず調べる必要があると判断した。また、イタリアへの接近を試みると同時に、それとは対照的な性格の東方（中東、東欧等）の芸術の価値を主張するポーランド系オーストリア人の美術史家ヨゼフ・シュゴフスキーへの関心も常に絶やさなかったことから、ヴァルデマール・ジョルジュの批評原理が複雑だった事が伺える。その意味で、イタリア以外の文化圏とヴァルデマール・ジョルジュとの関わりも併せて考察することが必要であると考え、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

1) 以上の背景を踏まえ、まず、ヴァルデマール・ジョルジュの批評と、同時代のイタリアの美術界の動向とが互いに如何なる影響を及ぼしたかを、文献調査を通じて明らかにする。ヴァルデマール・ジョルジュはパリで活動したデ・キリコやカルロ・カッラ等のイタリア人芸術家らの作品を集めた「パリのイタリア人」展を企画し、伊仏の美術界の関係強化を目指した。同展覧会の出品者には、マルゲリータ・サルファッティ率いる「ノヴェチェント」にも参加していた芸術家が多いことから、ヴァルデマール・ジョルジュが「ノヴェチェント」との連帯を目指していたことが窺われる。こうした事実をふまえ、当時のイタリア美術界、特に「ノヴェチェント」とヴァルデマール・ジョルジュの関係を明らかにする。

2) また、自身が主催する美術雑誌『フォルム』を中心に、ヴァルデマール・ジョルジュが主張した重要な概念の一つとされる「ネオ・ユマニスム」が、イタリア美術界との連帯を求める活動との関係でどのように位置付けられていたかを分析する。

3) ヴァルデマール・ジョルジュは美術史家ヨゼフ・シュゴフスキーの業績に対して関心を示しただけでなく、上記の「ネオ・ユマニスム」の画家としてロシア出身の複数の画家も重視していた。このように、イタリアへの接近とは別に、ヴァルデマール・ジョルジュの東方への興味がどのように機能していたかを調査する。

3. 研究の方法

1) イタリアの美術界との関係を明らかにするべく、ローマの国立中央図書館、考古学・美術史図書館、アンジェリカ図書館等で資料調査を行なった。特に、マルゲリータ・サルファッティの主著『近代絵画史』(*Storia della pittura moderna*)や、近年、多数刊行された「ノヴェチェント」及びサルファッティ関連の研究書を参照した。また、ヴァルデマール・ジョルジュがイタリアでの講演旅行を行い、ムッソリーニへの会見も果たした1930年代前半に、イタリアの建築雑誌『クアドランテ』(*Quadrante*)等に寄稿したフランス語の論文を調査した。

2) 上記の調査と並行して、パリのフランス国立図書館や美術史・考古学研究所図書館等で文献

調査を行い、ヴァルデマール・ジョルジュやルネ・ユイグラ、キュビズムを始めとする前衛芸術に対して批判的な態度をとった批評家、美術史家らの著作・雑誌論文を継続して調査した。

3) ヨゼフ・シュゴフスキーに関しては、2020年以降のコロナウィルス蔓延に伴う渡航規制の影響や、フランスおよびイタリアでの調査を優先させる必要から、当初予定していたウィーンの国立図書館等での文献調査は実行する事ができなかった。この調査については、本研究を引き継ぐ形で行う科研費の研究課題(「两大戦間期仏・伊・独の美術界における「伝統」と「起源」を巡る言説編成の分析」)(2023年度基盤研究C:課題番号23K00172、代表研究者:飛嶋隆信)にて引き続き行い、本研究では、シュゴフスキー研究上重要な文献を購入することで準備を進めることとした。

4) 研究成果

主として以下のような研究成果があった。

1) ヴァルデマール・ジョルジュは「ノヴェチェント」とそれを率いるマルゲリータ・サルファッティへの接近を試みたが、伊仏両国を軸とした地中海文化圏の構築、という彼の理想は両国において理解者を得られなかった。また、『近代絵画史』等の著作で表明されたサルファッティの近代美術史観も、キュビズムやイタリア未来派等を高く評価しており、キュビズム以降の流れを否定的に評価していたヴァルデマール・ジョルジュの見解とは食い違っていた。ムッソリーニの庇護を得てイタリア美術界の有力者となったサルファッティは、ムッソリーニとの関係悪化によりファシスト政権での要職を失い国外逃亡へと追い込まれたが、彼女の失脚後、ヴァルデマール・ジョルジュが伊仏美術界連帯という彼自身の理想を実現するための新たな題材を模索せざるを得なかった、その経緯が明らかになった。

2) その結果、彼が見出したのが、近代美術の存在意義を古代ローマとのつながりに見出す、という方策であった。すでに1930年に自身が主催する雑誌『フォルム』で「ローマ」特集を組み、イタリア国内外のローマ美術専門家の論考を集めていた彼は、中でもイギリスのローマ美術専門家、ウージェニー・ストロングや、ファシスト政権下で将来を囑望されながら、後に反ファシズム・親共産主義的立場に転じた考古学者ラヌッチョ・ピアンキ・バンディネリらによるローマ美術観に影響を受ける。それは、ローマ美術が「人間」の表現を重視し、かつ多様な非征服文化が齎した要素を柔軟に吸収して形成された、という見方であり、彼は、フランスやロシアなど国籍が異なる芸術家らを擁し、近代芸術の多様な手法で「人間」を表現することを掲げた「ネオ・ユマニスム」の模範をローマ美術のあり方に見出したのである。そもそも、彼が夢想した伊仏連帯による文化の再構築という発想も、このように、近代の国民国家の枠組が成立する以前の古代ローマのあり方を参照することで形成されたものと思われる。ま

た、起源をローマに見出す、というこの選択は、当時の考古学界で進められていた、古代ローマ文化の復興・称揚というプロジェクトにもうまく合致していた。ファシスト政権成立以前から準備が始まっていたこの計画は、政権に権威を付与する目的で「古代ローマ文化のアウグストゥス展」として結実することになる。最終的に、ヴァルデマール・ジョルジュは、イタリアの雑誌『地中海芸術』(*Arte Mediterranea*)に論文を寄稿し、「ネオ・ユマニズム」の「人間」とはローマの伝統を継承するファシズムが現代に復元する「人間」のことである、と規定するに至るが、単独で見ると唐突な印象を与える30年代の彼の言説と行動は、上述のように、ファシズム政権下でのイタリアとフランスとの連帯を模索する過程を経て、段階的に育まれたものである事が、今回の調査で判明した。

3)「3. 研究の方法」でも述べたように、本研究は、2020年以降のコロナ禍による渡航制限のため、当初予定していたオーストリア・ウィーンでのヨゼフ・シュゴフスキー自身に関連する資料の収集を断念せざるを得なかった。しかし、このシュゴフスキーに関連して、新たに調査を進めるべき課題が明らかになった。ヴァルデマール・ジョルジュは、著名な美術批評家兼鑑定家としての地位を確立していたバーナード・ベレンソンが、イタリア・ルネサンスの造形表現を特権視する姿勢を1920年代から批判していたが、そのベレンソンは、戦後の著作『美術と歴史』(*Aesthetics and History*)においてシュゴフスキーの理論を強く否定する見解を表明した。これに対してヴァルデマール・ジョルジュは著書『バーナード・ベレンソン反駁』(*Réfutation de Bernard Berenson*)を刊行し、改めてベレンソンを批判している。ところで、近年の諸研究により、ベレンソンがイタリア・ルネサンスばかりでなくビザンティン美術にも深い関心を寄せていた事が指摘されている。リトアニア出身で、移住先のアメリカで高等教育を受け、イタリアに終の住処を求めたユダヤ人美術批評家ベレンソンが、生前には公にしなかった面が明らかになりつつある今、ベレンソン、ヴァルデマール・ジョルジュ、シュゴフスキーらは、仏・独・伊という西洋の主要な文化圏に外部から参入し、その「本質」を見出そうとした美術史家や批評家、という立場を共有していたのであり、彼らが各々公に表明した見解は別として、これらの論者には芸術に対する嗜好において通底する部分があった可能性を想定することができよう。

また、本研究が当初から取り組んでいた、芸術における「伝統」と「国民性」とを結びつける言説の論理を分析する作業に、「外国人の眼差しによる伝統の創設」という問題系を導入し、自らが所属する国家の枠内で芸術の「伝統」を語る様々な出自の美術史家や批評家たちが各自選り取った戦略が、いかなる形で交差していたか、その言説のネットワークを可能な限り詳細に辿るといふ、新たな視点を得られた事も本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 飛嶋隆信	4. 巻 第13号
2. 論文標題 ヴァルデマール・ジョルジュの「ローマ」－両大戦間期美術批評における伊仏関係の一事例について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 早稲田大学イタリア研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 25, 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 飛嶋 隆信
2. 発表標題 ヴァルデマール・ジョルジュの美術批評とイタリア美術界
3. 学会等名 イタリア言語・文化研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飛嶋 隆信
2. 発表標題 両大戦間期の美術界における伊仏関係 ヴァルデマール・ジョルジュの周囲で
3. 学会等名 オンライン研究会「20世紀イタリアの芸術と文化」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松井裕美・木俣元一（編）、論文筆者：飛嶋 隆信	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 26
3. 書名 古典主義再考 前衛美術と「古典」（論文題名：両大戦間期のフランス芸術における「伝統」と「危機」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------